

幼児から児童を対象とした総合的な表現活動の試みと支援
—手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇を中心として—
Attempt and Support Related to Integrated Expressive Activities
Intended for Preschoolers and Schoolchildren
—With a Central Focus on Participatory Paper Puppet Theatres and
Music Dramas Using Handmade Musical Instruments

北浦恒人*・滝沢ほだか**・横田典子**

KITAURA Tsuneto, TAKIZAWA Hodaka, YOKOTA Noriko

要 旨：

本研究は幼児または児童の表現活動である「造形表現」「音楽表現」「身体表現」の3つの分野を取り入れ、総合的な表現活動を支援する方法を探求することを目的としている。本報告では、2013年に岡崎女子大学・岡崎女子短期大学で開催された、夏休み親子講座「音楽とあそぼう！」において、手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇を中心にしたプログラムの作成と実践について検討を行った。保護者を対象としたアンケート調査の結果、プログラムに3つの分野を取り入れ、1つひとつのプログラムが参加型ペープサート音楽劇に結びつくように設計したことで、約半数の保護者が事後に3つの分野を取り入れた総合的な表現活動の重要性を認識することが明らかとなった。このことから、幼児から低学年児童までの異年齢の子どもにおける総合的な表現活動の支援について一定の方向性が示唆された。

Abstract

How to assist preschoolers and schoolchildren in performing the integrated expressive activities was groped for by adopting three expressions, “formative expression,” “musical expression” and “bodily expression,” at a summertime parent-child workshop “Let’s play with music!” of this university by practicing participatory paper puppet theatre using handmade musical instruments. A questionnaire delivered to the participated parents revealed their awareness of the importance of integrated expressive activities with the three expressions, and thereby how to assist was oriented.

キーワード：親子講座、参加型、音楽劇、ペープサート、手作り楽器

Keyword: Parent-child course, participatory, music drama, paper puppet theatre, handmade musical instrument

I. はじめに

幼稚園教育要領および保育所保育指針に示されている5つの保育内容領域のうちの「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことをねらいとしている。この「表現」領域における幼児の表現活動には「造形表現」「言語表現」「音楽表現」「身体表現」が

あり、小学校学習指導要領においてはこの4つの表現活動に相当する教科として「図画工作」「国語」「音楽」「体育」が挙げられる。

高野・小田（2002）は「幼児の身体表現は音楽表現や造形表現と相互に密接に関係しあって、子どもの生活の中で成立している」とし、小笠原（2012）では遊びの中にこの3つの表現活動が密接に関係しあって現れることが多いことを示して

*岡崎女子大学子ども教育学部 **岡崎女子短期大学幼児教育学科

いる。また、植田（2013）は、「耳をすまして感じる活動」「声を出して参加する活動」「身体を伴った活動」など簡単な表現活動から協同的な表現活動まで、段階を踏んで場面を設定すると、積極的な参加と協同的な表現が得られることを示していることから、3つの分野の表現活動は互いに密接な関係にあることがいえる。

また、人形劇・音楽劇と表現活動の関係では、「幼児は人形劇に対して非常に興味を示す。これは幼児が人形を擬人化し、創造的同一化をして物語の世界に入り込むといった経験をしながら、一種の生活経験をしているからであると考えられる。したがって、人形劇は演劇の鑑賞力や創造力を養うだけではなく、生活経験を拡大することのできる総合的経験であると考えられることができる」（熊田 2010）、「参加型の音楽劇は協同的な学びを引き出す音楽活動として有効であると言える」（植田 2013）、というように人形劇や音楽劇を使って、それぞれの表現を支援する方法の有効性は先行研究によって示されている。しかしながら、3つの分野を取り入れた総合的な表現活動として、参加型の音楽劇を用いて支援する試みは成されていない。

そこで、本研究では、「造形表現」「音楽表現」「身体表現」または、「図画工作」「音楽」「体育」の3分野を取り入れ、総合的な表現活動を支援する方法を探求することを目的としている。具体的には、手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇を中心とした親子講座プログラムを作成し、2013年に岡崎女子大学・岡崎女子短期大学での夏休み親子教室「音楽とあそぼう！」講座において実践を行った。

なお、この親子講座の対象者年齢は幼児から小学校低学年であるため、異年齢の幼児または児童に対応する講座内容となるよう心がけた。特に講座の中心となるペープサート音楽劇は脚本を滝沢、ペープサート制作を横田、音楽は北浦が創作し、幅広い年齢層の子どもたちが楽しめる内容とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 概要

講座名：夏休み親子教室「音楽とあそぼう！」

日時：2013年7月31日（水）13:00～15:00

場所：岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 合奏室

参加者：親子12組（子ども2歳児2名、3歳児4

名、4歳児3名、5歳児5名、6歳児2名、9歳児1名、計17名、親12名）

スタッフ：ピアノ演奏（教員1名）、講座進行（学外講師1名）、講座補助（学生スタッフ5名）

2. 内容

親子教室の概要を表1に示す。①の「楽器を作ろう！」ではダンボールとペットボトルの底部とゴムひもを材料にし（図1）、多色のマーカーを使ってデザインできるオリジナルのカスタネットを制作した。制作方法と留意した点は次のとおりである。(1)見本を提示する。制作のイメージが湧くような絵を描き、子どもたちの関心が高まるように配慮した（図2）。(2)あらかじめカスタネットの形に切断したダンボールを配布し、子どもが絵を描く。子どもの独創性を引き出せるよう積極的に声かけを行った。(3)「目打ち」を使って穴を開け、ゴムを通す。「目打ち」は、子どもの年齢によってはスタッフまたは保護者が使用した。(4)あらかじめ切り取ってあるペットボトルの底部をテープで貼り付ける。ペットボトル底部の断面は鋭角になっている場合があるので、木工用ボンドでコーティングしたものを用意した（横田 2014）。

表1 夏休み親子講座「音楽とあそぼう！」プログラム

プログラム	所要時間
① 楽器を作ろう！〔造形表現〕	約30分
② たのしく歌いましょう！ 〔音楽表現〕	約3分
③ ごあいさつの歌〔音楽表現〕	約2分
④ リズムであそぼう！ 〔身体表現・音楽表現〕	約10分
⑤ リズムでアンサンブル！ 〔音楽表現〕	約15分
⑥ 休憩	約15分
⑦ 劇中歌の練習〔音楽表現〕	約5分
⑧ ペープサート音楽劇	約20分

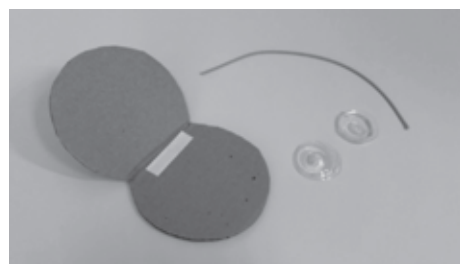


図1 オリジナル・カスタネットの材料



図2 見本のカスタネット

②の「たのしく歌いましょう！」では参加者全員（親子全員）で幼児曲「となりのトトロ」より《さんぽ》を歌った。これは同じ曲を斉唱することにより、講座参加者の一体感を高めることを目的としている。

③の「ごあいさつの歌」（図3）では子ども一人ずつの名前をピアノ伴奏のメロディーに乗せて歌いかけ、それに対して「はーい」という言葉で子どもが返事をできるように促した。子どもの自己紹介と自ら進んで参加するきっかけとして取り入れた。

ごあいさつの歌



図3 「ごあいさつの歌」

④の「リズムであそぼう！」（図4）ではエレクトーンを使用して、ワルツやスィングのリズムに合わせて①で制作したカスタネットを使い、リズム打ちながら、身体を動かした。3拍子の舞曲のリズムや、ジャズのスィングのリズムを使用することにより、より活発な身体表現活動を援助することを目的としており、また自作のカスタネットを使用することで、楽器に親しみをを持たせることを意図とした。



図4 「リズムであそぼう！」実施風景

⑤の「リズムでアンサンブル！」では制作したカスタネットを使用して、受講者を複数のグループに分け、リズム打ちの模倣奏を行った。また、音楽に合わせてリズムアンサンブル（合奏）を行った。リズムは音楽において旋律や和声と同等に大切であるため、聴いたリズムをまねて表現することによって、音楽の楽しさや音楽に対する興味関心を喚起することを目的としている。

⑥では約15分の休憩。

⑦ではペープサート音楽劇が始まる前に劇中で歌われる「怖がりお化けのチッチ」と手遊び歌「トントントンひげじいさん」の歌唱練習をした。これは劇中で登場人物と一緒に歌を歌い、劇中で登場人物との一体感を高めるねらいがある。

⑧では子どもたちが、自作の手作りカスタネットを持ってペープサート音楽劇「怖がりお化けのチッチ」を観劇した（図5）。



図5 ペープサート音楽劇「怖がりお化けのチッチ」上演風景

「怖がりお化けのチッチ」のあらすじを以下に示す(図6)。

子どものお化け「チッチ」はとても怖がりです。お化けはいつも人間からは見えませんが、「チッチ」は怖がりなので、人間から見えてしまうのです。ある日、「チッチ」は人間の子ども「さきちゃん」と「ゆうとくん」に出会いますが、怖くてお友達になれません。しかし、この劇を観ている子どもたち(受講者)の手作り楽器(カスタネット)の元気な応援により、とうとうお友達になることができました。ところが怖がりを克服して友達になれた瞬間、「チッチ」の姿は子どもたちから見えなくなってしまいます。そして最後に全員で「怖がりお化けのチッチの歌」を歌い、永遠の友情を誓います。

図6 「怖がりお化けのチッチ」のあらすじ

音楽劇にペープサートを用いた理由は、今回の講座がボランティアによる演劇であったため、練習時間の確保が難しかったことが挙げられる。このペープサートは、セリフを暗記する必要がなく、本体に工夫をすることで人形操作の表現を補うことができる。今回使用したペープサートも物語の鍵となる手をつなぐ動きが強調されるように、片腕を大きく、動かせるように制作した(図7)。

練習時間の軽減という観点からすれば、紙芝居や絵本も考えられたが、画面が小さいゆえに子どもが隣接して座る必要があり、手遊びや楽器を演奏する際に子ども同士がぶつかる恐れがあった。

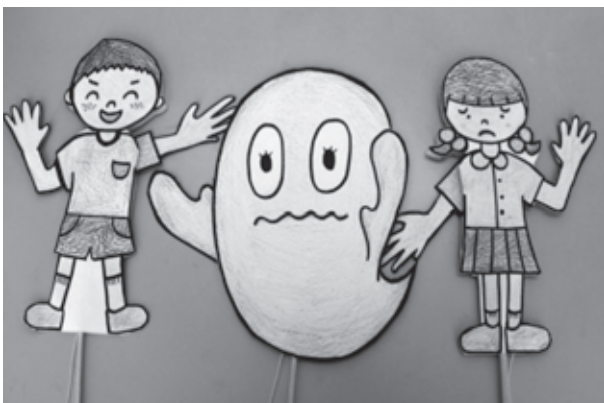


図7 「怖がりお化けのチッチ」のキャラクター

音楽劇上演に際して10曲(内、9曲がオリジナル曲、1曲が既成曲)の音楽を使用した。劇の進行と使用する音楽を図8に示す。制作した音楽

の詳細は下記の通りである。

1. 「前奏曲」(図9)
2. 「プロムナード」(図10)
3. 「トントントントンひげじいさん」(既成曲)《参加型》
4. 「怖がりお化けのチッチの歌(A)」《参加型》(図11)
5. 「逃げろ！」(短調版)
6. 「逃げろ！」(長調版)
7. 「応援！」《参加型》(図12)
8. 「悔しい！」
9. 「どこにいるの?チッチ！」
10. 「怖がりお化けのチッチの歌(B)」《参加型》

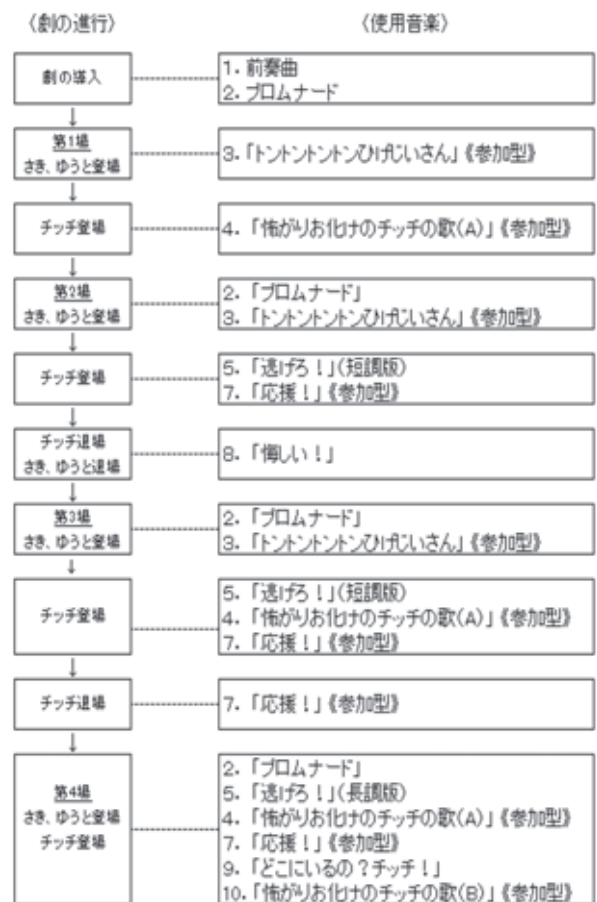


図8 劇の進行と使用した音楽

3. 4. 10. の曲では、子どもたちが劇登場人物と一緒に歌って登場人物との一体感を味わい、7. の曲では手づくりカスタネットを使って劇登場人物を励まして、劇に参加できるようにした。

劇中に演奏した楽曲はのべ21曲になるが、その中で11曲が歌を登場人物と一緒に歌い、登場人物を自作のカスタネットで応援するという参加型になっている。

ペープサート音楽劇「怖がりお化けのチッチ」
前奏曲

Lento $\text{♩} = 60$ 作曲：北浦恒人

図9 前奏曲

怖がりお化けのチッチの歌 (A)

Allegro $\text{♩} = 120$ 作詞：滝沢ほだか 作曲：北浦恒人

Soprano

Piano

Scp.

Pno.

Scp.

Pno.

図11 怖がりお化けのチッチの歌 (A)

ペープサート音楽劇「怖がりお化けのチッチ」
プロムナード

Andante $\text{♩} = 80$ 作曲：北浦恒人

図10 プロムナード

M4 応援!

Allegro $\text{♩} = 120$ 作曲：北浦恒人

図12 応援!

Ⅲ. 結果と考察

親子講座当日の様子と、プログラムを行った際の留意点を下記に示す。

まず、①の「楽器を作ろう！」で制作したカスタネットは、年齢の低い子どもでも時間内に作る事ができるように基本的な構造を平易にしたため、参加した子ども全員が作り終えることができた。年齢の高い子どもも、制作のイメージが湧くような絵を描いた見本を提示したことで、こだわりを持って活動に取り組んでいる姿が見られ、飽きてしまうこともなく制作を続けていた。また、初対面の親子が受講しているため、自由で和やかな雰囲気となるための声かけを心がけた。その影響もあり、カスタネット制作を行う最中に、子ども同士、親同士、スタッフと子ども、スタッフと親とのコミュニケーションを図る姿が多く見られた。さらに、子ども同士でお互いに作ったカスタネットを鳴らして確認し合う姿も多く見られたことから、造形活動から表現活動への繋がりが示唆される。

②の「楽しく歌いましょう！」では、親と子ども両方に馴染みのある歌を選曲し、斉唱することにより、互いに歌う楽しさを共有し、全員が同じ歩調で足踏みをしている姿が見られたことにより、一体感を感じていたことが推察される。

③の「ごあいさつの歌」では子ども一人ひとりに歌いかけ、メロディーに乗せて返事をするという、一方向ではない相互の活動を通して、より積極的な活動への参加を促す目的で取り入れたプログラムであるが、手を大きく挙げて返事するなどの姿があったことから、音楽表現から身体表現への繋がりが見られた。

④の「リズムであそぼう！」では①で自ら制作したカスタネットを使ってリズム打ちや身体表現活動を行ったところ、音楽に合わせて自ら進んで身体を動かす様子が見られた。③同様、積極的な音楽表現活動と身体表現活動に繋がる可能性が示唆された。

⑤の「リズムでアンサンブル！」ではグループに分けてリズム合奏をすることにより、最初はグループ内でリズムにばらつきがあったものの、グループ間の駆け引きにより、次第にリズムが合うようになり、音量も増したことから、音楽活動に協調性が見られるようになった。

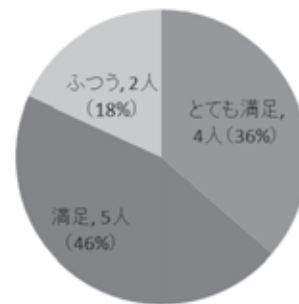


図 13 講座の内容について

⑦ペープサート音楽劇上演前に、劇中歌の練習を行った結果、既知となった曲が出てきたときに「この曲知っている！」という姿がみられた。

⑧の「ペープサート音楽劇」では劇中に数回歌われる「怖がりお化けのチッチ」の歌を主人公(チッチ)と一緒に歌い、①で制作したカスタネットを使い、主人公を応援することで劇登場人物との一体感を図った。劇の終了後には、ペープサートを持って走りまわったり、「怖がりお化けのチッチの歌」を口ずさんだりしている姿が見られたことから、子どもたちが劇の登場人物に親しみを持ったことが示唆される。

講座終了後の保護者を対象としたアンケートの結果は、下記の通りである(12名中11名が回答)。講座全体を通して尋ねた「内容に満足できたか」というアンケート結果では、11名中4名が「とても満足」、5名が「満足」と回答したことから、総合的な表現活動の講座として一定の評価を得たことが示唆される(図13)。具体的な意見としては、「楽しい講座なので回数を増やしてほしい」、「複数回あると良い」、「短い時間にたくさんの内容が入っていて飽きずに楽しめた」など、講座の内容を評価する意見がみられた。

また、「劇の内容がお子様に合わせていましたか」という質問に対して11名中10名の保護者から合っているとの回答が示された(図14)。これは、異年齢の子どもたちが年齢に応じて楽しめる内容を意図して脚本、美術、音楽全てを創作したことが、良い結果に繋がったといえる。しかし1名が全く合わないと答えており、参加した子どもと親の様子から、9歳児の親の回答であったと推察される。本講座は、異年齢の子どもたちが楽しめるように設計されているが、幼児の参加者が多いため幼児中心となってしまい、小学校中学年の子ども

もにとっては幼い子どもがやる内容と捉えられてしまった可能性が示唆される。

その一方で、「劇中において音楽は効果的に使われていましたか」という質問に対して11名中8名が「そう思う」、2名から「やや思う」という肯定的な回答が得られたことから、劇中の創作した音楽については一定の評価を得ることができた(図15)。

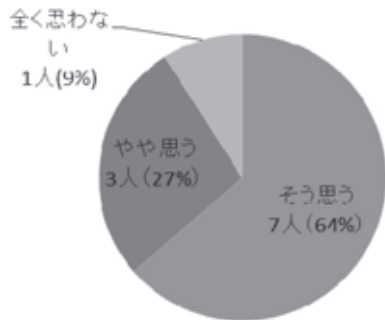


図14 ペーパーサート音楽劇の内容はお子様の年齢

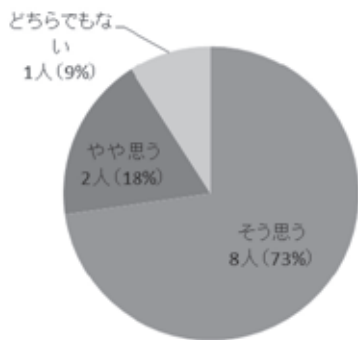


図15 音楽は劇中において効果的に使われていましたか

最後に、子どもの表現活動において、「造形活動」「音楽活動」「身体表現活動」「音楽・造形・身体表現活動」の4つの活動について、どのような割合(%)で行うのが望ましいか、事前、事後のアンケートでそれぞれパーセンテージとして示してもらった結果を表2に示す。表中のA～Iは、回答した保護者を示している。この結果、欠損データを除いた9名中4名の回答が事後に「音楽・造形・身体表現活動」の割合を上昇させていた(Bさん、Cさん、Hさん、Iさん)。また、変化のなかった2名のうち、1名(Dさん)は事前事後アンケート共に、3分野を取り入れた総合的な活動を一番高く回答していた。従って有効回答者9名のうちの5名が本講座を受講した後、総合的な活動の重要性に対して一定の評価をしたことが示唆される。特に、Hさんは事前に総合的な活動は必要ないと答えたにも関わらず、事後には5割の

活動を、音楽・造形・身体表現活動にあてたことから、講座によって総合的な表現活動の重要性を見出したといえる。

表2 保護者が考える、子どもの表現活動における活動別の望ましい割合

		音楽活動	造形活動	身体表現活動	音楽・造形・身体表現活動
A	事前	20%	20%	20%	40%
	事後	30%	20%	20%	30%
B	事前	50%	20%	20%	10%
	事後	20%	20%	30%	30%
C	事前	30%	20%	25%	25%
	事後	30%	20%	20%	30%
D	事前	20%	20%	20%	40%
	事後	20%	20%	20%	40%
E	事前	25%	25%	25%	25%
	事後	30%	20%	30%	20%
F	事前	20%	20%	30%	30%
	事後	20%	30%	30%	20%
G	事前	30%	30%	30%	10%
	事後	30%	30%	30%	10%
H	事前	25%	25%	50%	0%
	事後	20%	10%	20%	50%
I	事前	20%	20%	30%	30%
	事後	10%	10%	30%	50%

一方、事後に「音楽・造形・身体表現活動」の割合を低く回答した3名のうち、Aさんは事後に音楽活動の割合を上げ、Eさんは音楽活動と身体表現を、Fさんは造形活動といった個別の活動を重視したため、「音楽・造形・身体表現活動」の割合が下がる結果となった。この原因として、講座の中では、個別の活動「造形表現」「身体表現」「音楽表現」の領域が独立して捉えられていた可能性が考えられる。具体的には音楽劇のなかで造形活動の際に制作した楽器と、音楽活動がそれぞれ用いられたものの、両者に直接的な関連性を見いだせなかったこと、身体表現活動がプログラムの一

部のみにも留まったこと、元々個別の活動の必要性を強く感じていたことなどが推測される。3つの分野それぞれの表現活動は、個々に大切なものではあるが、総合的な表現活動の必要性も実感できるよう、更にプログラムを工夫することが今後の課題でもある。

自由記述からは、講座の内容をととても満足と答えた人のなかに「ものづくりとうたとダンスとお話があって、得意不得意があっても一緒に遊ぶことができた」という記述がみられた。これは、造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現の4つの分野にまたがる意見であり、この講座のねらいが伝わった結果となった。

今後の研究課題として、総合的な表現活動をさらに支援できるよう、子どもたちの反応によって劇のストーリーが変わっていくものや、子どもたちが劇のストーリーを即興的に作っていくものなど、現代音楽におけるシアター・ピース的な作品も探求したい。また、劇以外でも、たとえば参加型の「絵本と音楽」による読み聞かせとリトミックの融合など、総合的な表現活動のあり方を探求していきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領 平成 21 年
- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領 平成 23 年
- 3) 厚生労働省：保育所保育指針 平成 20 年
- 4) 高野牧子・小田ひとみ (2002) 「線画を題材とした幼児の身体表現」日本保育学会大会発表論文集 p.272 2002 年
- 5) 熊田武司「保育士におけるパネルシアターおよびエプロンシアターの実践について」岐阜聖徳大学短期大学紀要 p.57-58 2010 年
- 6) 小笠原大輔『「保育内容（表現）」における複合的教材の試み』－「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を一度に楽しむ－文京学院大学人間学部研究紀要 p.341 2012 年
- 7) 植田恵理子「協同的な学び」を引き出すための音楽活動 2 －参加体験型音楽劇「音の絵本 西遊記」から得られるもの－ 花園大学社会福祉学部研究紀要 p.104、p.108 2013 年
- 8) 北浦恒人・横田典子・滝沢ほだか「手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇の実

践」－音楽的視点－日本保育学会第 67 回大会発表要旨集 2014 p.174 2014 年

- 9) 横田典子・北浦恒人・滝沢ほだか「手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇の実践」－造形的視点－日本保育学会第 67 回大会発表要旨集 2014 p.458 2014 年